第１回　ふくしま元気トーク　まとめ

【 開催概要 】

日　時	令和元年８月７日（水） 午後６時～午後７時３０分
テーマ	認知症にフレンドリーな福島市
場　所	甘食・茶屋 結（ゆわえ）
出席者	（１）原啓子さん　（５）星拓大朗さん　（９）山田里緒さん （２）加藤キイさん　（６）浅野悦子さん　（１０）柳沼真緒さん （３）斎藤真尚さん　（７）齋藤悠斗さん （４）伊藤麻樹子さん　（８）春日部紘也さん
（福島市）	木幡市長

【１　市長あいさつ】

全国では、来年にも認知症の方が 600 万人を超えるという推計になっています。本市でも１万４千人の方がいると言われています。認知症だけでなく、認知症度Ⅱ以上の見守りが必要な中等度以上の認知症の方も１万人近くになっています。本当に誰もが認知症になりうるものになってきていますが、そのうえで認知症の方々、あるいは認知症を持つ家族の方々、認知症に近い方々とどのように接していくのかが社会的な課題だと思っています。本日は、現場で接している方や学生の方を交えながら、いろいろな意見を交わしてもらいたいと思います。

【２　主な発言内容】

（１）認知症の方との関わり

●認知症になり不安な家族の相談を受け、家族の負担軽減やできるだけ認知症を進行させないための対応などを考え、介護サービスにつないだりしている。

●認知症の疑いがある方や認知症の方で病院に行きたがらない方、介護保険サービスになかなかつながらない方の自宅を訪問し、支援する認知症初期集中支援チームの活動をしている。

●認知症だけではなく、生活に関するさまざまな相談を受けたり、介護予防や認知症になっても安心して暮らせる地域づくりの手伝いなどをしている。

●祖母を介護する中でいろいろな学びもあり、認知症のちょっと悪い面なども見てきた。人としていい部分や、ちゃんと人格があるというところも知ることができた。

（２）認知症にフレンドリーな福島市となるためには何が大事か

①認知症に対する偏見

●周りの偏見もあるが内なる偏見というのが大きく、なかなか認知症を認められないうちに時間が経過し、暮らすことが難しくなることがある。もう少し早い段階で認知症も普通の病気だということを自分自身が受け入れる、そして家族も受け入れることができれば、周りの人にも相談でき、支援にもつながると思う。

●偏見をなくすことについては、地域の方に親族が認知症だということを打ち明けることができず、苦しい思いをしている姿を見ていた。幼少の頃から認知症に触れ合う機会がもう少しあれば、周りの人に頼ることや早く支援機関につなげることができるではないかと思う。

●丹野智文さんという方は、39 歳のときに若年性認知症を発症しました。車関係の会社に籍を置いていますが、本人が相談に応じるカフェの窓口を開設、病院の診断が終わった人の相談に応じる事をしています。また、全国を講演しながら駆けまわってもいます。そういう人が目の前にいると、偏見というのは随分消えるのが早いのではないかと思います。

●自分で物忘れに気づいたり、周りの人が気づいたりしてから、相談機関や医療機関に受診するまでの期間が、長い方では3、4年から8、10年とかかる方もいる。それは、なかなか認知症のことを気軽に相談できないという気持ちがあると思う。

②認知症を正しく理解

●認知症を正しく知ってもらう啓発は大事。そのためにも、福島市の全ての小中学校で認知症サポーター養成講座を行い啓発できたらいいと思う。

●ニュースなどで徘徊やお金を取られる妄想など、インパクトの強いものだけが報道され悪いイメージがついている。認知症を正しく理解してもらうためにも、地域への啓発や全市民とまではいかないが認知症サポーター養成講座を受けるのが一番いいと思う。

●小中学校での認知症サポーター養成講座の実績が、小学校で49校中13校、中学校で20校中3校というのは少し寂しいです。講座を行った学校の効果などをまとめて、講座を行わない学校にお知らせするなど、何とか講座を行う時間を確保できるような努力をお願いしたい。

●誰もが認知症を正しく理解している地域。打ち明け話のように認知症のことを相談するのではなく、腰や膝が痛いのと同じくらい気軽に周りに相談して、支えられるような地域になればいいと思う。

●福島市全体で見守っていくためには、周囲の方々が認知症に対する正しい知識を持ち、認知症の方を支える近所の方を増やすことなど、見守り力を強化することが必要ではないか。

●「毎日がアルツハイマー」という作品を観て、周りでも認知症を知ろうと思った人がいる。そういう作品や映画を観ることも、認知症について気軽に知ろうというきっかけになると思う。

●認知症の方の家庭へ小中学生が訪問することは、プライバシーの問題があると思いますが、実際にどのように生活されているのかを知ることができる機会だと思う。忘れやすいからメモ紙が張ってあるとかを見ることで、認知症の方は自宅ではこういう風に暮らしているということを、小中学生のうちから知る機会があることが重要なのかなと思いました。

市長　●学校で講座を取り入れるとすれば、一種のモデル的なものを提示するのは一つの案かもしれません。その場合、単に認知症の講座だけでは学校側も取り入れづらくなると思います。例えば、ＡＥＤの使い方や救命の仕方の講座と、認知症の講座のどちらを選択するのかとなれば、現実問題としてＡＥＤの方を選択すると思います。その点では、認知症だけというよりは、この年次に関してはＡＥＤを組み込むとか、この学年なら認知症を組み込んだ方がいいだろうという感じで進めていければ、取り入れやすくなると思います。

●皆さんの話を伺うと、やはり一番は正しい理解を皆さんに広めていくこと。それには、何と言っても早い段階から教育というか、その課程で一旦教えていくことが一つ大事なポイントとなっていますね。それはできる限り進めていかなければならないと思いますが、それだけではなかなか正しい理解は広められません。子どもたちだけではなく、地域の人たちはどこまで理解しているのか。自分自身が認知症について認めないということもあります。成人の方への理解をどのように広めたらいいのかとなりますね。

●「毎日がアルツハイマー」などの作品を、地域の人たちが集まる会議の前段15分位で上映するだけでも、認知症を理解する機会になると思います。

③居場所づくり

●認知症の方でも、それぞれの役割を生かしていく機会や場、人としてここに居ていいんだなという居場所が必要だと思う。それは、偏見をなくしたり理解を促進したりというところの上に成り立つと思っている。

●認知症カフェが居場所の一つになる。私たちの法人の場合、誰が認知症の方か地域の方か分からないというのが売りとなっていて、認知症や障害のあるなしに関わらず、誰でも集える居場所となっている。

●町内会の役員を担っていた方が、認知症になったことで役員を辞め、その後居場所がなくなり自宅に引きこもってしまう人もいる。町内会で役割が持てる環境があればいいのかなと思っている。

市長	●ちゃんとできていた人ほど、役割を果たせなくなったことに対する負い目みたいなのを感じるのではないかな。その負い目を感じないような雰囲気づくりをすることが大事だと思います。一方で、そういう状態に合わせた役割をつくっていくことも必要だと思います。

（３）その他

●オレンジカフェはただ実施するのではなく、家族の方に対して認知症への理解や接し方の理解をいただくことも含めて実施すれば、もっと促進につながると思う。

●お金がなく介護サービスが使えない方もいます。ボランティアで徘徊に付き添ってくれる方など、何か新しい発想で介護保険ではないサポートの仕組みができればと感じている。例えば、学生が施設に実習に来るように、在宅に付き添いボランティアが一日いてくれる仕組みがあると助かると思う。

●認知症の方を支える職員の不足が予想されていて、2025 年には福島県は充足率 75%と予想され、千葉県と並んで全国１位の減少率となる。若い学生や小中学生も認知症を知る機会ができ「介護の仕事は素敵な仕事だな、支えるって楽しい、いいことある」みたいなところが、もっと醸成されないかなと毎日悩んでいる。

市長	●介護職の人材確保というのは非常に重要な問題です。とにかく今は日本全体で人材不足になっています。私も介護保険制度の導入時に関わっていましたが、あの頃はみんなが介護職に入ってきていました。現在は、介護保険制度全体が大きくなり過ぎて、介護職員の処遇問題などブラックなイメージも少しついてしまい、大変な状況になってきています。結果的には、他の福祉職や保育職もそうですがお金の問題が出てきて、やはり一定の処遇改善を進める必要があると思います。

【３　まとめ】

今日は認知症に絞って意見交換させていただきましたが、私自身、認知症に対する理解もそうですが、もっと広い面でのバリアフリー的な、あるいはユニバーサルデザイン的な理解を広める必要があると思っています。福島市は、来年オリンピック・パラリンピックの野球・ソフトボール競技が開催されます。私自身は、オリンピック開催を成功させること以上に、オリンピックを機にこの町を良くしたい、オリンピックの精神を生かして良くしたいという思いがあります。

その一つに、オリンピックは共生社会の理念があります。障がいのある人もない人も、あるいは認知症もそうです。そういう人たちに偏見を持たず、一緒になって暮せる社会を目指さなければと思い、今回一番わかりやすい言葉で心のバリアフリーも含め、バリアフリー推進パッケージを作成し推進することにしました。その中で、障がいについてもやはり根強い偏見があるわけですが、障がいのある人もない人も分け隔てなく暮らせる地域を目指そうと、それは差別防止条例ではなくて、より積極的に地域の中でみんなが生きていけるような、前向きな条例にしようと思っています。当然、障がい者の皆さんに対する偏見がなくなれば、そういう心の土壌ができてくれば、仮に認知症についての知識が少なくても、認知症の方に対して、周りのサポートもやりやすくなると思っています。

その点では、そういう共生社会の理念に基づくような社会を大きな視点でつくっていきたいと思っていますし、その中に認知症も含め、個別の分野分野で市役所と地域の皆さんが協力し合いながら、良くしていくことができればいいと思っています。これからも皆さんには、認知症対策をはじめいろいろな面でご協力いただきますようお願いを申し上げ、今日はこれで終わりにしたいと思います。本当にありがとうございました。

参加者の感想

●話し合われたことが１つでも達成できることを願います。（小中学生への講座など）

●会場の雰囲気がリラックスできる感じで良かったです。学生さんの新鮮な意見を聞くことができ、今後も一緒に活動できれば良いなと感じました。

●テーマに普段関係のない方、関わりのない方の意見も聞けると良かったと思いました。

●次回以降の話になりますが、学生同士で議論を交わすのも良いのかなと思いました。

●認知症について広く周知するためには、まず学生から啓発、推進できるような組織があれば、より身近に感じることができるのかなと思いました。

●認知症にフレンドリーなまち福島市を目指し、看護師として地域の方々と協力して活躍していけたらと思います。